

砂漠の国の最恐姫2
後宮の寵姫と皇妃たちの思惑

秦朱音 Akane Hata



アルファポリス文庫

【今世】

リズワナ・ハイヤート

アーキルの寵姫。前世のアディラ・シュルバジーとしての記憶を持っている。

アーキル・アルIIラシード

冷徹皇子と呼ばれるアザリムの第一皇子。リズワナを寵愛している。

ルサード

リズワナが飼っている白猫。月を見ると白獅子の姿に変わる。

ルウルウ・マヒール

アザリムの皇女。オルファの娘。

オルファ・マヒール

元は女官だったが、皇帝に見初められ第二妃となる。信心深い性格。

エルナース・ジャファド

皇帝の第四妃。アザリムの高官の娘。社交的で顔が広い。

【前世】

アディラ・シュルバジー

アザルヤード皇帝に使える女戦士。リズワナの前世。

イシャーク・アザルヤード

アザルヤード帝国の皇帝。アーキルの前世。

ナジル・サーダ

アザルヤード帝国の宰相。アディラを裏切り、皇位篡奪を謀った。

第一章 二人の皇妃

吸いこまれるような紺碧こんへきの空に、一匹の蝶ちようが舞う。

白い羽が太陽の光を反射して、瞬まばたくように輝いた。その眩まぶしさが、ここ砂漠の国アザリムへの本格的な夏の到来を告げていた。

蝶の舞に目を奪われた私は、空に向かってそっと右手を伸ばす。すると、傍らでシタールを奏でていた楽師が手を止めたので、音がぶつりと途切れた。

「リズワナ、集中しなさい」

後宮いしむの女官長ダーニヤの厳しい口調に、私は肩をすくめる。

「でも私は、舞は不得手で」

「アーキル殿下にお仕えするなら、舞の一つや二つできて当然！ 午後には刺繡ししゅうの練習と楽器の稽古も控えているのですよ。集中して早く覚えなさい」

「楽器も刺繡も舞も、全部苦手なんです。代わりに、読み書きや剣術ならいくらでもやります。だから……」

「読み書きだの剣術だの……そんなものはできなくてよろしい！」

ダーニヤはびしゃりと言い放つ。

シタールを胸に抱えたまま、ことの成り行きを見守っていた楽師も、その叱声に驚いてびくつと肩を震わせた。

(またダーニヤを不機嫌にさせてしまったわ)

後宮ハレムにいる数多くの女官を束ねる立場だけあって、ダーニヤは威厳と迫力に満ちている。身分の高い者に媚こびへつらう狡猾うそさにさえ目を瞑こぼれば、彼女ほど女官長に適した人材はほかにいない。個性が強く我儘な女官たちをうまくまとめ上げるその手腕は、誰からも高く評価されていた。

だから私も、余程のことがなければ、ダーニヤの言いつけには従うことにしている。しかし、さすがに今日は、少々やりすぎなのではないだろうか。

日が昇る前に稽古を始めたのに、すでに太陽は天頂近く。

体力に自信のある私ですら暑さに参っているのだ。稽古に付き合わされる楽師は、たまったものではないだろう。

「……そのくらいにしておけ」

背後から低い声が出た。

振り向くと、柱の陰から一人の男が姿を見せる。

腕を組み、柱に背中を預けて意地悪そうに微笑んだその人は、アザリムの第一皇子

アーキル・アル・ラシードだ。

褐色かつしよくの肌に、艶のある黒髪。

瑠璃色るりの双眸そまうは、まるで今日の夏空のように澄んでいる。

彼はこの後宮の主であり、私の最愛の人だ。

「ダーニヤ。リズワナに舞など向かないと知っているだろう？ どうしてもと言うなら、長剣サウバルを渡して剣舞でもやらせたらどうだ？」

「お言葉ですが、アーキル殿下。リズワナは後宮ハレムでたびたび騒ぎを起こすので、周りも手を焼いております。剣など渡せば、何をしてくすか分かったものではありません！ 殿下の寵姫ちやうきとして一からしつかり教育いたしますので、もう少し私に預けていただけませんか？」

ダーニヤが頭を下げる。

私はその隙に、アーキルのもとに駆け寄った。

そろそろこの場を切り上げたい。得意の剣術ならいくらでも厳しい稽古に耐えられるが、舞に刺繍に楽器に……そんな淑やかなものはどう頑張ってもうまくできない。

助けを求めてアーキルの顔を見上げると、彼は口元を緩めて軽く頷いた。

「ダーニヤ。お前に預けなくとも、リズワナはすでに俺の寵姫だ」

「いいえ、殿下。今のリズワナはアーキル殿下にふさわしくありません」

「俺が今のままで構わないと言っている。それに、もしもリズワナが俺の子を産めば、寵姫どころか一足飛びに妃になれる」

アーキルはダーニャに向けて居丈高にそう言うのと、私に視線を戻してニヤリと笑った。

(子を、産む……?)

動揺した私は、思わず彼から視線を逸らして下を向く。

淑やかさの欠片かけらもない私でも、乙女が持つべき最低限の恥じらいくらいは持ち合わせている。アーキルの子を産むとは、つまりは私の身をアーキルに委ねる、ということだ。

熱くなった頬に両手を当てて何も言えずにしていると、アーキルが強引に私の腕を掴んで引いた。

「というわけで、リズワナを借りるぞ。ダーニャ」

「アーキル殿下！ お待ちください……！」

ダーニャの声を無視して、アーキルは私を後宮ハレムの建物の中に連れていく。

背後のバルコニーでは、置いてけぼりを食らったダーニャの悔しそうな声と、長時間の稽古から解放された楽師の喜びの声が入り交じって響いていた。

ここ砂漠の国アザリムは、高い山々がそびえ立つアザルヤード山脈を背に、南の海まで広がる大国である。砂漠を挟んで西にある隣国ナセルを属国とし、国境を接している。

アザリムの第一皇子の名は、アーキル・アルⅡラシード。

そして彼の後宮ムで名ばかりの寵姫として暮らすのが私——リズワナ・ハイヤートだ。私はアザリムの西の端、隣国ナセルとの国境近くにあるバラシユという街で生まれ育った。

父はナセルとの交易で財を成した豪商。アザリムの慣習に従って四人の妻を娶り、私はその四人目の妻の子として生まれた。

母が早くに亡くなったこともあって、ハイヤート家で私の居場所はないも同然だった。義理の兄妹たちとも折り合いが悪く、幼い頃から私の心の拠り所は、飼い猫のルサードだけだった。

幸か不幸か、今世の私は容姿に恵まれ、「女神ハワリーンの生まれ変わりのように美しい」ともてはやされて育った。

絹のような滑らかな肌に、宝石のごとく輝く瞳。すらっと伸びた腕や華奢きゃしゃな体つきは、この時代の美の基準にぴったり合致していた。

ちなみに、わざわざ今世のとか、この時代のと付け加えたのには理由がある。不思議なことに、私には前世の記憶が残っているのだ。

私の前世は、数百年前——現在のアザリムとナセルに跨がる地に、アザルヤード帝国が栄えた時代に生きた、一人の女性。

史上最恐の女戦士として歴史に名を残した、アデイラ・シウルバジーだった。

古代アザルヤードの時代を経て、今のアザリムに伝わる神話の中に、「人は数百年ごとに生まれ変わって再び出会う」という記述がある。

今、自分が出会っている人はすべて、前世でも関わりがあった人なのだと。さらに、生まれ変わる時に何か一つは必ず、前世の自分が持っていたものを引き継いで生まれ変わるのだとか。

その神話が真実ならば、私がアデイラ・シウルバジーから受け継いだのは、女戦士としての戦闘力と強さだ。

リズワナ・ハイヤートとして生まれ変わった今の私も、華奢な見た目からは想像できないほどの怪力と、剣術の腕を持っている。

(この力を受け継いでいなければ、今の私はなかったかもしれない。だからアデイラに感謝しなくては)

私がバラシユの街を出て後宮^{ハレム}にやってきたのは、アーキルとの運命的な出会いが

きっかけだった。

とある春の日のこと。

アーキルは従者を引き連れて、狩りをするためにお忍びでバラシユを訪れた。

滞在中のお世話を命じられたのが、バラシユ一の豪商である、我がハイヤート家だった。

ちょうどその日、家を飛び出して迷子になった私の愛猫ルサードが、アーキルの滞在する天幕に迷いこんだ。ルサードを追って私もその天幕にこっそりと忍びこんだのだが、そこでアーキルに見つかってしまったのだ。

それが私たち二人の出会いだった。

その頃のアーキルは、不眠の呪いに侵されていた。

夜になると、悪魔^{ジン}の幻影が次々に現れてアーキルを襲い、傷付けるのだという。

アーキルの口から、「呪いのせいで、生まれて一度も眠ったことがない」と聞いた時には、驚くのと同時に、助けてあげたいと強く思った。

突如天幕に現れた私のことをランプの魔人の類だと勘違いしたアーキルは、私に「俺を眠らせてみる」と命じた。できなければ、お父様の首を刎ねてやると脅して。

魔法を一切使えない私は、アーキルをどうやって眠らせようかと頭をひねった。

そこで思いついたのは、私がアーキルに神話の読み聞かせをすること。

もしも彼が眠れなかったとしても、気になる場面で語りをやめて、「続きはまた明日！」とでも言っておけばいい。そうすればアーキルは物語の先が気になって、簡単に私やお父様の命を奪えなくなると考えたのだ。

(でも予想に反して、アーキルはあの晩、生まれて初めて眠ることができたのよね)
不眠の皇子だったはずのアーキルはその夜、私の隣でぐっすりと眠りについた。夢の中で悪魔ジンに襲われて苦しむこともなく。

翌朝、目を覚ましたアーキルは、自分の身に何が起こったのか、にわかに理解できなかったそうだ。

一度たりとも経験したことのない、平穏な夜。

アーキルは私と一緒に眠ることができると確信したのか、私を自分の後宮ハレムに連れ帰ると言っておかなかった。それで私は今、生まれ故郷のバラシユから遠く離れた後宮ハレムで暮らしているというわけだ。

アーキルはなぜ不眠の呪いにかかったのか。

なぜ私とともにいると眠ることができるのか。

数々の試練を経て私たちが突き止めた真実——それは、アーキルと私の前世に深く関わるものだった。

私と違ってアーキルには前世の記憶がないのだが、彼の前世はアディラ・シユルバ

ジーの主君、イシャーク・アザルヤード皇帝陛下だったと分かったのだ。

イシャーク陛下は、アザルヤード帝国を統べる若き皇帝。

武官を目指すアディラを取り立ててくれた方だ。

自ら剣の稽古を付けてくれるほど近い存在で、時に優しく、時に厳しく、アディラを導いてくれた。

陛下の恩に報いたい——アディラは自分の命を懸けてでも、陛下をお守りすると心に決めていた。

しかし結局、その誓いを守ることはできなかった。

イシャーク陛下は、帝位ミカド篡奪を目論んだ宰相ナジル・サーダの手によって命を落とした。その際、ナジルと共謀していたファティマ王妃が放った不眠の呪いにかかってしまった。

だからアーキルは、アザリムの皇子として生を受けた今世でも、不眠の呪いに苦しんでいたのだ。

一方、アーキルの母親は、彼の前世など知る由もない。眠らない不気味な赤子に困惑した母親は、幼いアーキルを密かにナセルの魔女に診せた。

ナセルの魔女は、アーキルの母親に告げた。

不眠の呪いは前世から続くものである。呪いを解くには、アーキルが前世で愛した

相手。を側に置くしかない——と。

アデイラの生まれ変わりである私が側にいる時だけに、アーキルは眠りにつくことができた。つまりアーキルの前世、イシャーク陛下が愛した相手は、前世の私——アデイラ・シュルバジーだったということになる。

敬愛してやまない主君が、アデイラを愛していた。

そんなことを、すぐに信じられるわけではない。

イシャーク陛下から愛の言葉をもらったことなど、一度もないからだ。陛下にとつてのアデイラは、臣下の一人にすぎない。そう思っていた。

アーキルには前世の記憶がないから、イシャーク陛下の本当の気持ちを確認する術はもうない。

(いつまでも前世に囚われるのはよくないと分かっているわ。でも……)

前世の想いに区切りをつけたいと願っていたのは、誰よりも私自身だったはずだ。

過去など忘れて、リズワナ・ハイヤートとして今世を生きていけばいい。頭ではそう分かっている。

でも実際には、そう簡単に割り切ることはできない。

アーキルは私のことを愛してくれていると感じる。だから、今世での彼の愛情を疑っているわけでは決してない。

でも、心のどこかで、私はイシャーク陛下のアデイラに対する愛情を疑っている。その疑念を勝手に今世の私たちに重ねて考え、アーキルとの関係を深めることに一歩踏み出せずにいるのだ。

アーキルに前世の記憶を思い出してほしい——単なる我儘にすぎないと分かっているけれど、それが私の本音。

イシャーク陛下はアデイラを愛していたのだと、アーキルの口から聞きたい。

そうすれば、私も過去に区切りをつけて、ようやく今を生きていける。

アーキルの愛情を、正面から受け止められる気がするのだ。

「アーキル、どこに行くのですか？」

無言で歩くアーキルに声をかける。

この廊下の先はアーキルの私室だ。こんな真つ昼間だというのに、皇子としての執務を休んでいいのだろうか。

私の心配をよそに、アーキルは余裕の笑みを湛たえて歩き続ける。

「リズワナ。夜市を知っているか？」

「夜市？」

故郷のバラシユとは違い、皇都では深夜まで市場が賑わっているという噂を聞いた

ことがある。実際に訪れたことはないのだが。

「皇都の夏は暑いから、市場も日没後に開かれるんだ。たまには後宮の外に出てみるのもいいんじゃないか？」

「アーキル！ もしかして私を、夜市に連れていってくれるのですか？」

「ああ。ダーニャにいびられた分、気晴らしするといい」

アーキルはそう言っただけで微笑んだ。

（嬉しい、外に出られるのね！）

閉鎖的な後宮の中は、自由に動きづらく息苦しい。ちょうど、体を動かしたくてうずうずしていたところだ。

アーキルと手を繋いでいなかったら、この場で飛び跳ねて喜んだかもしれない。

アーキルの腕に抱きついてお礼を言うと、彼は得意げに顎を上げた。

私室の扉を開けて中に入る。

アーキルは早速靴を脱いで裸足になり、寝台に横になった。彼の手招きに応じて、私もその横に寝そべる。

いつもは忙しなく働く女官たちも、この暑さに疲れて休んでいるのだろう。後宮はやけに静かだ。

静寂に包まれた空間にアーキルと二人きりしていると、嬉しさもそうだが気恥ずかし

さのほうが勝る。

アザリムの民から冷徹皇子と呼ばれるアーキルも、私といる時は穏やかで優しい。彼の視線を浴び続けるのが照れくさくなり、私はあえて明るく、子どものようにしゃいでみせた。

「アーキル！ 夜市が楽しみです。夜に備えてお昼寝でもしますか？」

「ああ、そうだな。今のうちに眠っておいてもいいし、ほかのことをしてもいい」

「ほかのこと？」

アーキルは寝台の上に半身を起こした。

仰向けに寝転ぶ私の顔に触れて、親指で頬を優しく撫でる。

瑠璃色の瞳が少し近づいてきたかと思うと、アーキルの唇が私のそれにそっと触れた。

「んっ……」

数か月前にアーキルと出会ってからのというもの、私たちは何度も同じ寝台で夜を過ごした。

でも、それはあくまでアーキルに物語を読み聞かせて眠らせるため。体を重ねたことは一度もない。

アーキルやダーニャから寵姫と呼ばれても、実感が湧かない理由はそこにある。

(口づけだけなら、もう慣れたけど)
 少しずつ深くなるアーキルの口づけを求められるまま受け入れて、私も両目を閉じる。

ふと、アーキルの左手が私の腰に伸びた。
 今までに経験したことのない、荒々しく熱のこもった触れ方に驚いて、私の口から小さく悲鳴が漏れる。

するとアーキルは、体を起こして私の顔を見下ろした。

「なぜ嫌がる」

「……アーキル、ほかのことってまさか」

「俺を拒む理由があるのか？」

「いえ、別にそれは……」

口では否定しながら、私は身を振^よってじりじりと寝台の端に体を寄せた。

大して乱れてもないドレスの胸元をさり気なく隠して、それから間に合わせの笑顔^をアーキルに向ける。

(驚いた……)

笑顔の裏にある私の緊張が透けて見えたのか、アーキルは深く息を吐いた。

「リズワナ」

「ご、ごめんなさい！ アーキルへの気持ちに嘘はありません。でも……」
 「でも？」

「……アーキルがイシャーク陛下の生まれ変わりだと知ってしまったから、どうしたらいいのか分からなくなっただけ」

そう、私は彼との距離感を測りかねていた。

アーキルは思い出せなくても、私はアーキルの前世をはっきりと覚えている。

私たちの前世——イシャーク陛下とアデイラは、主従関係を越えて愛し合うような関係ではなかった。アデイラはイシャーク陛下に忠誠を誓い、陛下もアデイラのことを武官の一人として扱った。

(私はアデイラじゃない。リズワナとして、アーキルのことだけを考えていればいい。それは分かっているのに……)

今の私は、アーキルの側にいられるだけで幸せだ。これからもずっと側で彼を支えていきたいと思っている。

しかし、だからと言って、私がアーキルの本当の妃になるなんて……そんなことが許されていいのだろうか？

アデイラにとつてのイシャーク陛下は、崇高で手の届かない、雲の上の存在だった。アーキルがイシャーク陛下の生まれ変わりだと知ってしまったてからは、どこまでアー

キルに近づいていいのか、自分でも分からなくなっている。

無意識に距離を置いてしまふ。

「俺の前世がそんなに気になるか」

「そういうわけでは……」

「前世と今世は違う。お前はアディラではない。リスワナ・ハイヤートだ。それに、そもそも俺には前世の記憶などない」

アーキルはそう言うと、私の背中に腕を回し、少し乱暴に私を抱き寄せる。

寝台の敷布が、二人の体の隙間でくしゃりと波打った。

近づいた彼の胸には、アザリム皇家の直系皇子にしか発現しないという獅子ライオンの痣あざ。

私はためらいながら、指先でその痣にそっと触れる。

不眠の呪いが解けたアーキルは、私を妃として迎えることに、もうなんの躊躇ちゆうちよもないのだろう。

(でも、私は……)

アーキルを心から愛しているつもりでいる。

それなのに、自分で勝手に引いた彼との間の一線を、越えられないでいる。



夜の皇都は、日中の暑さが嘘のような涼しさに包まれていた。

アーキルと二人、街の広場を歩いて進むと、目の前に大きな門が見えてきた。

アーチ型をしたその門の手前には、高くそびえる鐘塔。塔のつぺんに設置された大きな鐘を、何人かの少年が左右交互にロープを引いて鳴らし始めた。

重厚な音色が、夜空に響き渡る。

「あの鐘が、夜市ナイトマーケット始まりの合図だ」

鐘の音にかき消されないように、アーキルが私の耳元で言った。

「そうなんですわね！ ちなみに、夜市ナイトマーケットでは何が売られているのですか？」

「皇都で一番大きな市だぞ。寶石や服、本に薬草。それから、魔道具や魔石なんかも手に入る。バラシユとは比べものにならないだろう」

「あら。でもバラシユはナセルとの交易が盛んで、魔道具の取り扱いは皇都に負け

ていませんよ？」

「それはそうかもしれんな。だが、目利きのリズワナでも十分楽しめるはずだ」

お喋りしゃべりをしながら歩いているうちに、私たちは門の入り口までやってきた。市に向かう人々でごった返しており、なかなか先へ進めない。

(さすが皇都だわ。アーキルの言った通り、バラシユとは比べものにならないほどの

盛況ぶりね)

人の波に押されながら、門を通る列に並ぶ。

ふと後ろを振り向くと、広場のずつと向こうにアーキルの後宮の建物が見えた。ドーム屋根や壁の青いタイルが、もう紫紺の夜空に溶けている。

今夜は新月。

ルサードを後宮に置いてきたのだが、この夜闇なら問題はないだろう。

「どうかしたのか？ リズワナ」

「いえ、ルサードのことを考えていたんです。今夜は新月だからちようどよかったな、と」

「そうだな。もしも俺たちが不在の間に、ルサードが月光を浴びて白獅子に姿を変えでもしたら、大騒ぎになるところだ」

「騒ぎを起こして、ダーニヤをこれ以上困らせたくありませんから」

「ダーニヤどころか、後宮中を困らせるのがお前の性分ではないのか？」

押搦うようにそう言うと、アーキルは私の手を取った。その手が、人混みに押されてはぐれそうになる私を、しっかりと繋ぎ止める。

アーチの門をくぐり、いよいよ夜市に足を踏み入れた。

(わあっ！)

門を抜けると、そこは別世界だった。

見渡す限り真つすぐに伸びる大通路、その左右に連なるいくつもの店、色とりどりのモザイクランプ。風に乗ってふんわりと届く香辛料の匂いも、私の心を浮き立たせる。

簡易なテントを店舗として並べただけのバラシユの市場とは違い、皇都の市場は常設店舗になっているようだ。

通路沿いの店舗列の裏には各店の奥へと続く小通路があり、さらにその向こうを覗くと、中庭のような空間が見える。あの中庭で隊商が荷解きをして、店主との商談が行われるのだろう。

天を仰げば、ドーム型のアーケード。

彩色されたアラベスク文様がランプの明かりに照らされて、美しく浮かび上がっていた。

「アーキル、ここはとつても素敵なお場所ですね！」

商人の娘の血が騒ぐ。早く店を見て回りたくてうずうずした私は、アーキルの返答も待たずに歩き始めた。

後ろで、アーキルのくすぐすと堪えたような笑い声が聞こえる。少しはしゃぎすぎただろうか。

(ビワにザクロ、あれは異国の蟠桃かしら。珍しい品ね)

(幾何学模様塗られた小壺。可愛い！)

(あの膝かけは羊毛で作ったもの？ 涼しくなったら重宝しそうだね)

買い物客が行き交う喧噪の中、どこからかシタールの音色と歌が流れてきた。店を回る足取りも、自然と軽くなる。

アーキルがちゃんと付いてきているか心配になって後ろを振り返ると、偶然、一つの小さな店が目に入った。

(あれは、魔石売り?)

なぜかその店に心惹かれた私は、軒先に並べられた石を見るために、店の前にしゃがみこんだ。

並んでいる商品といい、店の装飾といい、周囲の店とは少し違う雰囲気を感じる。

「いらっしやい、お嬢さん」

銀髪の男性店主が奥から顔を出した。

顔立ちや髪の色から、きつとナセル商人だろう。年は五十歳前後といったところか。私は屈みこんだまま、目の前の魔石を指差した。

「こんばんは。これはナセルの魔石ですか？ とても綺麗ね」

「そうですね？ ナーサミンの山で採れた魔石を加工したものでね。種類も豊富

だから、ぜひどうぞ」

見ると、魔石は種類別にかごに分けて陳列されている。

私は、アーキルの瞳と同じ瑠璃色の石を一つ手に取った。ランプの明かりに透かして見ようと顔を上げると、店主が驚いたような表情で私を見ていた。

「お嬢さん、その短剣に付いている魔石はどこで手に入れたんだね？」

「え?」

店主が指差したのは、以前私がアーキルにもらった短剣だった。

アーキルが幼い頃にナセルの魔女から受け取ったもので、柄に琥珀色の魔石が埋めこまれている。

「この琥珀色の魔石も、ナセルのものだと聞いています」

「でしょうな。だが、その石は特別だ。よく出合いなさった」

「……どういうことですか?」

店主の話を聞くために立ち上がると、後ろにいたアーキルも私の隣に並ぶ。

私たちが興味を示したことに店主は少し慌てて、「いやいや、そう大した話でもないんですがね」と前置きした上で話し始めた。

「人は数百年ごとに生まれ変わって再び出会う——アザリムでは、そう信じられているでしょう?」

「ええ。アザリムの古くからの神話に、そう書いてあります」
人は生まれ変わる。

今の自分が知る人はすべて、前世でも関わりがあった人である。
アザリムでは、小さな子どもの頃に一度は読む話だ。

「実は、その神話には続きがありましたな。アザリムの人はあまり知らんでしょうが、
ナセルではむしろそっちのほうが有名な逸話でね」

「そうなの？ 知りたいわ、聞かせてくださる？」

私の言葉に、銀髪の男は笑顔で頷いた。

「ナセルではこう言われていますよ。人が死を迎えると、体はすぐに朽ち果てる。し
かし心は永遠だ。朽ち果てた体から離れた心は、空に上り星となる……とね。星は数
百年の間夜空で瞬き、流れ星となって地に戻るんです」

「心が地に戻る……それが、人の生まれ変わりということですか？」

「その通り」

神秘的な話に心が躍った。

隣にいたアーキルも、頷きながら興味深そうに耳を傾けている。

「お嬢さん。流れ星の中にはね、稀にナーサミン山地の岩に下りて、魔石に宿るも
のものもあると聞くよ。その人が前世で抱えていた思いによって、魔石が持つ力も変わっ

てくる。自分の前世の魔石と出合える人は少ない。その点、お嬢さんは幸運だ」

「幸運？ なぜかしら」

「その琥珀色の魔石は、お嬢さんの前世の心だよ。今世でもきつと、悪いものから
守ってくれる」

その言葉を聞いた瞬間、左の腰のあたりで、琥珀色の魔石が何かに共鳴したように
小さく震えた。

（魔石は、前世の人の心……この魔石は、アデイラ・シウルバジーの思いなの？）

人の心は星となり、数百年後に流れ星となって地に戻る。

それだけでも夢のような話なのに、その心が魔石に宿ることがあるなんて。

数多ある星の中で、地上に落ちて魔石に宿るのはごく一部だという。その中で自分
の前世の魔石と出合える確率は、想像できないほど低い。奇跡を超える奇跡だ。

魔石売りの店を離れ、私とアーキルは再び夜市の大通りを歩き始めた。

短剣に埋めこまれた琥珀の魔石の存在が気になって、気持ちちがそわそわと落ち着か
ない。

黙りこんだまま歩く私のヴェールを、アーキルが無造作に上げた。

「リズワナ、もう疲れたのか？」

「疲れてはいません。体力だけは自信がありますから！ ただ、先ほどのナセル商人

の言葉を思い返していただけです」

ナセルの魔石売りが語った、あまりにも神秘的な話に、私の頭も心もまだ追いつかない。

この琥珀の魔石がアデイラの心だったなら——そう考えると、胸が締め付けられるように苦しい。

（幸運という言葉で、そう簡単には片付けられないのよ）

アデイラが命を落としたのは、アザルヤード帝国の海の上だった。

初恋相手のナジル・サーダに欺かれ、毒を盛られ、瀕死の体でなんとかたどり着いた船上。

そこでアデイラは、ナジルの裏切りを知った。

敬愛する主君イシャーク陛下が不眠の呪いを受けて命を落とすところを、目の当たりにしたのだ。

自分の命を懸けてでも、イシャーク陛下をお守りする。

その誓いを果たせないまま、アデイラは絶望とともにアザルヤードの海に沈んだ。

生まれ変わっても必ず陛下のもとに参ります——そう固く心に誓いながら。

この琥珀の魔石は数百年の時を超え、奇跡に奇跡を重ねて私の手元に届いた。

アデイラの「生まれ変わってもイシャーク陛下のもとに」という強い願いが、そう

させたのだとしか思えない。

幸運と言って、いいのか。

私はアデイラの思いを受け取り、それをきちんと果たせているのか。

幾多の思いが押し寄せる。

再び胸の奥が苦しくなって、私はアーキルの手をそっと握った。

「スリだ！ 捕まえろーっ！」

背後から、怒声のような叫び声が聞こえた。

振り向くと、大通りの人混みの向こうが騒然としている。

そこから数秒も待たずして、私の目の前にいた買い物客の合間から、屈強な男が一人飛び出してきた。

黒のターバンで頭から口元までを隠したその男は、私とアーキルを左右に突き飛ばして走り去る。

「ちよっと……あれがスリ!? 捕まえてやるわ」

「おい、リズワナ。待て！」

「アーキルはここにいてください！ すぐに終わらせますから」

止めるアーキルを振り切って、私はスリの男を追った。

大通りは多くの買い物客で溢れている。ここを真っすぐに走って逃げるのは至難の業だ。

案の定、スリの男はあちこちで、人にぶつかりながら進んでいく。

(こういう場所では、小柄な私のほうが有利なんだから！)

人々の合間、足元の狭い隙間をすり抜けて走り、私はあつという間にスリの男に追いついた。

「その男、待ちなさい！」

男は私を振り返って舌打ちすると、すぐ側にあった薬屋の店舗に押し入った。

店にいた女性客の一人を商品かごの上に突き飛ばすと、彼女が手に持っていた袋を手荒く奪う。

「こら！ 待ちなさいって言っているでしょ！」

私が叫び、男の足元に滑りこんで足を引っかけた。

すると男は体勢を崩し、女性客から奪ったばかりの袋を地面に落とした。袋の中からは薬草のようなものが飛び出して、地面に散らばった。

「きゃあっ！」

突き飛ばされた女性が、悲鳴を上げる。

店の隅に立てかけてあった木材に体がぶつかり、彼女の頭上に倒れてきていたのだ。

「危ない！」

倒れる木材に気を取られた私の一瞬の隙を見計らい、スリの男は地面に落ちた薬草の束を拾い上げた。そのまま薬屋の店舗の奥に続く小通路を抜け、中庭のほうに逃げていく。

男を追い続けるか、女性客を助けるか。

私は迷わず女性客のほうに腕を伸ばした。倒れてきた木材を支え、彼女の頭を守る。

「大丈夫ですか!? 怪我をしませんか？」

「え、ええ……ありがとうございます」

「さあ！ 私がこれを支えている間に、早く！」

片手を差し出して、その女性を立ち上げさせる。

女性が私から離れたのを確認して、地面にゆっくりと木材を寝かせた。

(ふう……間一髪！)

一息ついてあたりを見ると、スリの男が拾いきれなかった薬草が地面に散乱したままになっていた。男が逃げた中庭に目をやると、すでに男の姿は跡形もなく消えている。

「逃がしてしまったわね……」

すぐに男を捕まえて、あっさり片付けるつもりだった。

長く後宮で大人しくしていたせいで、随分と体が鈍ったようだ。取り逃がした悔しさに、私は唇を噛む。

「オルファ、大丈夫？」

先ほどスリに突き飛ばされた女性のもとに、友人らしき別の女性が駆け寄った。

二人とも上等な生地 of 衣服を身にまとっている。特に二人が被っている絹製のヴェールは、庶民には決して手に入らない高級品だ。

二人は何者なのだろうかと考えているうちに、その場にアーキルが現れた。私がかなか戻らないので、痺れを切らして迎えにきたのだろう。

「ごめんなさい、アーキル。スリを取り逃がしてしまいました！」

アーキルに駆け寄るが、彼は私ではなく、先ほどの二人の女性客をじっと見ている。

「……リズワナ。お前はなぜ皇妃と一緒にいるんだ？」

「皇妃？ 誰がですか？」

まさか、と気づいて振り向くと、女性客二人がアーキルの前に並び、軽く頭を下げた。

「オルファ皇妃に、エルナーズ皇妃。奇遇ですね」

「驚きましたわ。こんなところでお会いするとは。アーキル皇子殿下」

返事したのは、転倒したのとは別の女性のほうだった。

アーキルは二人を皇妃と呼んだが、今のアーキルに妃はいない。

第一妃だったファイルーズ様が後宮を去って以降、アーキルの妃の座は空席となっている。

(つまり、お二人は皇帝陛下の妃ということね？)

二人とも二十代から三十代、アーキルや私と大きく年は離れていないように見える。アーキルに促され、私も二人に挨拶をした。

「リズワナ・ハイヤートと申します」

「ああ、あなたがリズワナね。噂は聞いているわ。私はエルナーズ・ジャファド。皇帝陛下の第四妃よ。そしてこちらが、第二妃のオルファ・マヒール」

エルナーズ様の言葉で、隣にいるオルファ様も私に会釈をした。

(まるで正反対のお二人だわ)

エルナーズ様は、目が覚めるような紅色の長衣を着ている。その胸元を大きく開けた装いは、彼女の気の強さを際立たせていた。

一方のオルファ様は、模様がほとんど入っていない深緑の長衣姿で、夜の闇に紛れてしまいそうなほど気弱で繊細に見えた。

オルファ様が俯いて黙りこむ横で、エルナーズ様は前に出て、堂々とアーキルと会話を続ける。

「アーキル殿下。もうすぐ私たちは静養のために旧都に向かいますでしょうか？　ですから今夜はオルファと一緒に、旅に必要なものを買求めに来たのですわ。先ほどのスリの男に、オルファが買ったばかりの薬草を盗まれてしまいましたけれど」

「それは残念。ですが、お二人に大きな怪我がなくて何よりです」
 オルファ様が買いにきた薬草というのは、病に臥せっている皇帝陛下のためのものだろうか。手に入れてすぐにスリに奪われるとは、運が悪い。

私が地面に散らばっていた薬草を拾い上げると、オルファ様が慌てて私の手に飛びついてきた。

「あっ……ありがとうございます。ああ、半分くらいは残っているわ。もう少し買い足して……」

ぶつぶつ言いながら、オルファ様は薬屋の店先に戻っていった。エルナズ様もその後に続く。

（うーん、なんだか独特の匂いね）

薬草を拾った時に、手のひらにその匂いが移ったようだ。右手を鼻に近づけると、甘ったるいような苦いような、初めての香りが鼻を突く。

「リズワナ、顔をしかめてどうした？」

「いえ、大丈夫です。薬草の匂いに慣れていなくて」

「そうだろうな。あの一件以降、アザリムでは薬草も薬も専売制に変えて、取り扱う商人もかなり絞っている」

「あの一件？」

「ああ。第二のカシム・タツパールを出さないためにな」

アーキルは少し目を細めて、それから行き交う人の流れに視線を向けた。

（カシム・タツパール……毒を塗った剣でアーキルの命を狙い、皇位継承者になろうとした男……）

幼い頃から不眠の呪いに苦しんできたアーキルにとって、幼馴染みで側近のカシム・タツパールは、家族のような存在だった。信頼する相手に裏切られたアーキルの心の傷は、きつと今もまだ癒えていない。

篡奪を企てたカシムの罪は重い。

しかしアーキルはカシムの命を奪うことはしなかった。辺境へ追放し労役を課して、それで済ませたのだ。

実の母親でさえ、アーキルにかけられた呪いを憂いて彼を遠ざける中、カシムだけは幼い頃から従者としてアーキルの側にいた。

カシムへの軽すぎるとも言える罰は、アーキルからカシムへの温情だったのだろう。一人にしてほしい——アーキルの寂しそうな背中からそう聞こえたような気がして、

私は彼から少し離れた。

「リズワナ、先ほどはオルファを助けてくれてありがとう」

私がアーキルから距離を取ったのを見て、エルナーズ様が声をかけてきた。

「スリの男は、ターバンで顔を隠していたわね。リズワナはあの男の顔を見た？」

「いいえ、エルナーズ様。あつという間に逃げられてしまったので、顔までは見ていなくて……」

「そう。捕まるといいのだけどね」

熱心に薬草を選び直すオルファ様の姿を見ながら、エルナーズ様はふうつと息を吐いた。

「オルファは、娘のルウルウのために薬を学んでいるの。だから薬草にとっても詳しくてね」

「ルウルウ様……ですか？」

「ええ。リズワナは何も知らないのね。オルファの娘はルウルウといつて、小さい頃にかかった病のせいで、声を出せなくなってしまったの。だからオルファはルウルウと、そして皇帝陛下のために薬を学んでいるのよ」

オルファ様には娘がいるらしい。第二妃の娘ということは、アーキルの義妹にあたる皇女様だ。

「あら、オルファが買物物を終えたようよ」

薬草を手にしたオルファ様が、こちらに歩いてきた。

「お待たせしてごめんなさい、エルナーズ」

「いいえ、オルファ。私は薬に詳しくないから、お任せできて助かってるわ。いつも頼って申し訳ないわね」

エルナーズ様の返答に、オルファ様は恐縮した様子で首を大きく横に振る。

「とんでもない、いつも助けてもらっているのは私のほうだもの。リズワナもどうか誤解しないでね」

気の弱そうなオルファ様は、私にもおどおどと怯えたような顔を向けた。

「リズワナは知らないと思うけど、私は元々後宮ハレムの女官だったの。庶民の出でいきなり妃となったものだから、困ることがたくさんあつてね。エルナーズはそんな私に、なんでも親切に教えてくれたわ」

「オルファ、やめてよ」

「いいえ、本当のことだもの。エルナーズは私と違って、アザリムの高官の家の出身で身分も高くて、顔も広い。この前なんて、私が困っていた時にナセルの魔術師を紹介してくれたし、それに……」

大人しそうな印象だったのに、オルファ様は一度話し始めると止まらない。

オルファ様は第二妃で、エルナーズ様は第四妃。

形式的にはオルファ様のほうが目上であるはずなのに、彼女は格下のエルナーズ様のことを、あたかも自分が仕える主人であるかのように語り続ける。

「まあまあ、オルファ。話はそこまでにしましょう。リズワナも驚いているじゃないの」

「あつ……ごめんなさい、リズワナ。私ったら……」

再び恐縮して下を向いたオルファ様の肩に、エルナーズ様が優しく手を添えた。

「では、そろそろ私たちは失礼しますわ。リズワナも夜市ナイトマーケットを楽しんでね」

二人の皇妃はアーキルにも頭を下げ、人混みの中に消えていった。

（スリから助けた相手が、皇妃だったなんて……。よく考えれば、私は皇帝陛下の後宮ハレムのことをほとんど何も知らないわ）

アザリムでは昔から、妻は四人までという慣習がある。皇家であろうと庶民であろうと、それは変わらない。

皇帝の妃となるのは、他国の姫やアザリムの貴族、高官の娘など、身分の高い女性だ。ただ例外もあって、後宮ハレムの女官など身分の低い者であっても、皇子を産めば妃になれる。

皇帝陛下には第一皇子アーキルと、第二皇子ラーミウ・イブン＝ラシード殿下の二

人の皇子がいるが、それぞれの母親はすでに亡い。

（四人の妃の中で、お二人が亡くなっている。つまり皇帝陛下の今の妃は、オルファ様とエルナーズ様だけということね？）

頭の中で整理しようにも、人数の多さに混乱する。

アーキルに確かめようと思って隣を見ると、彼も何か考えごとにふけていた。

「アーキル？ どうかしめましたか？」

「……いや。まだお前に伝えていなかったことがあるのを思い出したんだ」

「何を、でしょうか」

「エルナーズ皇妃が言っていただろう？ 陛下の静養のために旧都に行く」と

「はい。静養の旅に必要なものを買いに来たと仰おっしゃっていました」

「そこに、俺とリズワナも同行することになっている」

「……え？ 私たちも旧都に？」

思わぬ話には、私ははっとした。

カシム・タツバルの一件の後、皇帝陛下の病は徐々に快方に向かっている。

しかし、この夏の暑さのせいで再び悪化するのではないかと、心配する声が上がっていたそうだ。

旧都は皇都よりも北西にあり、標高が高く涼しい。

避暑を兼ねて、真夏の間だけ政務の拠点をそちらに移すことになったという。
 (まさか、もう一度旧都に行くことになるなんて)

アザリムの旧都イシユタヴァは、アザルヤード帝国の都が置かれていた場所だ。
 前世の私、アディラが生まれ育ち、そして命を落とした地でもある。

かの地に再び立つことを想像すると、嬉しさよりも不安が大きい。

かといって、妃でもない私の立場で、旧都行きを拒むことはできないのも分かっている。

(これも何かの運命かもしれない。琥珀の魔石を通じて、アディラがきつと私たちを守ってくれるわ)

動揺を隠し、私はアーキルに笑顔を向ける。

「……アーキル、分かりました。私も旧都に行きます」

「気分う必要はない。後宮から旧都に行くのは、皇妃二人とルウルウくらいのものであるのんびりお喋りでもして時間を潰せばいい」

「もう……私がお喋りよりも、体を動かすほうが好きだと知っているくせに」

私が口を失らせると、その顔を見たアーキルが噴き出した。

「エルナース皇妃は知らんが、オルファ皇妃はナセル出身の女官上がりだ。お前も気安く話ができるだろう」

「そうできたら嬉しいですけど。そう言えば、オルファ様にはルウルウ様以外にも皇子がいらっしゃるのですか?」

女官が皇帝陛下の第二妃の位に着いたということは、オルファ様は男児を産んでいないはずだ。そうでなければ、妃ではなく側女の扱いに留まる。

「ああ。オルファ皇妃は十五年前に男女の双子を産んでいる。ただ、皇子は生まれて間もなく亡くなった」

「なんと……そんなことがあったのですね」

「双子の兄のルシユデイーは亡くなり、ルウルウも病の後遺症で言葉を話せない。オルファ皇妃は落胆して、心を病む寸前だったそうさ。だからエルナース皇妃が心配して、ああやって四六時中、寄り添っているんだらう。オルファ皇妃は元々、エルナース皇妃付きの女官だったと聞いている」

「オルファ様に心の支えとなる方がいらっしゃってよかったです。そうでなければ、あまりにもお辛いでしょから」

息子を亡くし、娘は病の後遺症で苦しんでいる。

オルファ様の心痛は計り知れない。

オルファ様から感じる暗い影は、地味な服装や気弱な態度などではなく、過去の心の傷のせいだったのだろうか。

いきなり堰を切ったように饒舌になって、エルナーズ様への感謝を口にしたのも、彼女の精神的な不安定さから来たものだと考えれば、理解できなくもない。

かつての主であったエルナーズ様は、オルファ様のことを誰よりも理解しているはずだ。オルファ様のエルナーズ様への傾倒ぶりを見れば、お互いに信頼関係で結ばれていることがよく分かる。

（ただでさえ、今は皇帝陛下を皆でお支えしなければならぬ大切な時。私も旧都で自分のできることをしなければ）

夜は少しずつ更けて、夜市は佳境を迎えていた。

買い物の一つもできていないことに気づいた私とアーキルは、もう一度大通りを歩き始めた。

第二章 旧都の記憶

「……うっ」

旧都への道すがら、馬車酔いが限界に達した私は、口元を抑えた。

すっかり血の気が引いて、両手は指先まで冷え切っている。狭い馬車の中、隣に座るアーキルが、私の頭を自分の肩にもたれさせた。

「リズワナ、ここは道が悪い。馬車を降りて自分で馬に乗るか？」

「いいのですか……？ 馬での移動なら、酔わずにすむと思います」

「分かった。用意するからここで待っている」

アーキルは御者に言って馬車を止めると、私を残して外に出ていった。

バラシユを出てアーキルの後宮ハレムに参じた数か月前にも、今日と同じように馬車酔いに苦しめられた。

馬車や船の類に乗ると、どうしても前世の船上での凄惨な記憶が蘇り、吐き気が込み上げる。毒を盛られ、瀕死の状態でナジル・サーダと戦った記憶が、いまだに私を縛り付けているのかもしれない。

(でも、一人で馬に乗るのなら平気。馬に乗ってアザルヤードの草原や砂漠を駆け回ったのは、懐かしい思い出もの)

吐き気を堪えながら横になっていると、しばらくして、アーキルが戻ってきた。

その腕で引いてきたのは、葦毛の美しい成馬だ。私はゆっくりと馬車を降り、その馬の鬣を撫でる。

「どうだ、少し大きすぎるか?」

「いいえ、大丈夫です」

周囲では、お付きの従者たちが心配そうな顔で見守っている。小柄で華奢な私
が、体格の大きい馬を一人で乗りこなせるわけがないと思っ
ているのだろう。

鐙に左足をかけ、反対側の足を振り上げて軽々と馬の背に跨がるところを見せると、
従者たちは揃って「おお」と声を上げた。

「行くか、リズワナ」

「はい!」

黒毛の馬に跨がったアーキルに続いて、私も馬を走らせた。

旧都イシュタヴァは、皇都から見て北西側の高地に位置している。アザルヤード山脈を臨む緑豊かな都市だ。

馬に乗った私たちは、緩やかな山道を登っていく。

頬をかすめる風が皇都よりもひんやりと感じられ、先ほどまでの馬車酔いが嘘のように引いていくのが分かった。

振り返ると、皇帝陛下の御一行からは、だいぶ距離ができている。

私とアーキルは馬を止め、丘の上からの景色を見下ろして待つことにした。

眼下には、見渡す限り続く大平原。

そしてその中を、大河がゆったりと走っている。旧都イシュタヴァにある内海と繋がる流れだ。

「綺麗……!」

数百年の時を経ても、ここから見える景色は変わらない。一面を覆う濃緑の草の匂い、点在するゴツゴツとした岩、陽光を受けて青くきらめく水面。

すべてが懐かしい。

この光景が自分自身の記憶のようでもあり、いつか夢で見たものにも思える。

ふと、私の頬を涙が伝った。アーキルに見られたくなくて、袖でそれをさっと拭いた。

皇帝陛下の一行と合流し、いよいよ旧都の中心部に入っていく。

隊列を短くして街中を早く抜けるため、私はアーキルの馬に乗り変えた。

「どうだ？ 旧都イシュタヴァは」

後ろに座るアーキルが、耳元で私に尋ねる。

「とても美しい街ですね。アーキルはここに来たことが？」

「何度か来たことはある。もちろん前前世ではなく、今世での話だがな」

アーキルが冗談めかして笑ったので、私も彼に笑顔を返した。

最近の私は、できるだけ前前世に関する話題を出さないようにしていた。以前、私が前世に拘る言葉を繰り返したあまりに、アーキルの機嫌を損ねてしまったからだ。

しかし、イシュタヴァはアザルヤード帝国の都。

ここに来れば、私は否応なしに前世の記憶に触れることになる。

アーキルもそれを分かっている、私がためらわず前世の話題を切り出せるように、気を遣ってくれたのだろう。

その気持ちが嬉しくて、私は手綱を握るアーキルの手に自分の手を重ねた。

行列の先に、木々が茂る森と旧宮殿のドームが見えてきた。

アザルヤードの伝統色である青に塗られた、ドーム型屋根が美しい。

「宮殿がこの場所から見えるということは……恐らく、あの森の手前あたりにアディラ・シユルバジの屋敷があったはずですよ。宮殿から目と鼻の先でしたから。それと、

あの森を東に行くと大きな内海があります」

「そうか。確かにお前の話は、旧都の地図と一致しているな。あの通りを曲がれば、内海のとりに出る」

「はい。イシャーク陛下とアディラが最期を迎えた場所ですよ」

アーキルは少し間を空けてから「内海に立ち寄るか？」と言ったが、私は迷わず断った。

私たちが命を落とした場所よりも、早く旧宮殿に入りたい。

旧宮殿には、イシャーク陛下との思い出の場所がたくさんある。武官任命の榮譽を受けた広間、剣の稽古を付けてもらった内廷の中庭、時を忘れて朝まで語り合った、内海を臨むテラス――

イシャーク陛下の痕跡を感じたくて、私は宮殿に到着するとすぐに馬を下り、門に向かった。

石造りの壁に囲まれた旧宮殿の門をくぐると、そこには広大な庭園が広がっていた。庭園の向こうには、青色を基調とした建造物がずらりと並んでいる。

宮殿に荷を運びこもうと忙しく行き来する従者たちの邪魔にならないよう、私とアーキルは庭園を見て時を潰すことにした。

「旧宮殿と言っても、思ったより手入れが行き届いているのですね」

「ああ。ここには前の皇帝の妃が今も暮らしている。皇帝が代替わりすると、母后以外の妃や側女は、旧宮殿に移ることになっているんだ」

「そうなのですか？ 皇都からこんなに離れた場所に？」

「実質的な幽閉と言ってもいいだろう。残念ながら今のアザリムでは、皇位を継がない皇子は命を奪われる運命にある。息子を殺された妃が、皇帝の母后を逆恨みすることも多い。だから最低限の暮らしを担保した上で、皇都から離れた旧宮殿に移しているというわけだ。後宮は皇帝の代替わりとともに、一度空になる」

「それでは、いずれオルファ様とエルナース様もここに？」

「いつかはそうなる。もつとも、そんな未来は何年も先であってほしいが」

「……それはもちろんです！ 皇帝陛下にはイシュタヴァでゆっくり静養して、お元気になっていただかなければ」

アーキルは私の言葉に小さく頷くと、宮殿に向かって歩き始めた。

私はアーキルの背中越しに、もう一度青の建物を眺める。

（この美しい宮殿が、皇妃たちの檻となっていたなんて……）

過ごしやすく穏やかな気候、雄大な自然、美しい青の宮殿——あの頃と変わらず残っているものも多いけれど、今の時代に旧都で暮らすとなると、不自由さは否めない。

皇都から離れている分、欲しいものは簡単には手に入らないだろうし、娯楽もない。華やかな宮殿生活を謳歌していた皇妃にとって、旧宮殿での暮らしは息が詰まるものになるだろう。

栄枯盛衰は世の習い。

そう分かっているにしても、かつてのイシュタヴァの栄華を知る私にとっては、切ない話だ。

ふと嫌な予感に囚われて、腰に下げた短剣の鞘を、強く握り締める。

風は止んだはずなのに、短剣の柄に埋まった琥珀色の魔石が、私の心を感じ取って震えたような気がした。



皇都から到着した私たちには、それぞれ私室が与えられた。

私に割り当てられたのは、皇都の私室よりも少し質素な部屋だった。調度品も少ないし、アーキルと二人で眠るには寝台も狭い。

それでも、側女の私にとっては十分すぎるほどの部屋だ。

それに、バルコニーからの眺めは最高だった。真夏の間、苦手な舞や刺繍の練習から解放されて、この部屋でのんびり過ごせるのだと思うと、それはそれで悪くない。バルコニーで気持ちのいい夕風に当たっていると、着替えを終えたアーキルが私を呼びにきた。

皇帝陛下から晩餐ばんさんに招かれたそうだ。私も急いで着替えを終えて、アーキルとともに旧宮殿のテラスに向かった。

私が皇帝陛下にお会いするのは、今日が初めてとなる。

アーキルの後宮ハレムに入ってからもう何か月も経っているし、旧都イシユタヴァへの移動もともにしていたはずなのに、これまで一度も皇帝陛下にお会いする機会がなかったのだ。

(緊張する……)

皇帝陛下は、血も涙もない冷徹皇子と呼ばれたアーキルの父親であり、ナセルを始め属国をいくつも従える大国アザリムの統治者でもある。

バラシユの小娘にすぎない私が対面するには、大きすぎる存在だ。

緊張せずにはいられない。

「リズワナ、顔が強張こわばっているぞ」

階段を上った先で、アーキルが振り返って言った。

「だ、大丈夫です」

「そう緊張するな。昔は誰からも恐れられていた皇帝陛下も、病に罹かかってからは、すっかり丸くなった。いつも通り、お前は堂々としていればいい」

「……はい、アーキル。少し気が楽になりました。晩餐をともにできるほど、皇帝陛下がお元氣になられてよかったです」

皇帝陛下が病に臥していたことは、長らく内密にされてきた。

しかし、カシム・タツバールの一件でアザリムの政まつりごとの場が混乱したことが原因で、陛下のご体調についての噂が、どこからか外に漏れてしまった。

最近ではアーキルの後宮でも、陛下のご体調を心配する声が上がっていたほどだ。

(陛下の病が公になったからこそ、こうして堂々と静養を理由に皇都を離れられたわけなんだけど……)

薬に詳しいオルファ様の献身もあり、一時は危篤状態だった皇帝陛下が、旧都までの長距離を移動できるほど回復したことは、不幸中の幸いだっただ。

そうでなければ、この混乱に乗じてよからぬことを考える輩が出てきても、おかしくなかったはずだ。

第一皇子アーキルが次期皇帝となることは、既定路線ではある。

一方で、アーキルには年の離れた弟のラーミウ殿下がいる。